

# 大学生のEQ教育における評価方法に関する基礎的研究

Methodology for Emotional Quotient Assessment in Undergraduate Education

川内健悟、大西智子、松尾真一郎、卜部匡司

分野：教育学、高等教育

キーワード：EQ教育、教育評価

## はじめに

本稿の目的は、EQ教育の実践を評価するための基盤となる理論モデルの構築を模索することである。具体的に言えば、大学生のEQを測定するために必要な評価の枠組みを開発すべく、そのための試行錯誤の過程を描写することである。

EQ (Emotional Intelligence Quotient) とは、一般的に「心の知能指数」と呼ばれ、いわゆる知能の高低を示した従来の知能指数 (IQ : Intelligence Quotient) との対比の中で説明される概念である (ゴールマン [1998 : 77])。こうしたゴールマンのEQ概念をもとに、徳山大学では2007年度から「EQ教育プログラム」を全学的に実施している。その背景には、学生たちに「人間力 (=社会を構成し運営するとともに、自立した一人の人間として力強く生きていく力)」を身につけてもらいたいという本学の教育理念がある。ところが、実際にEQ教育プログラム推進していく中で、現在のところ3つの大きな問題に直面している。

第1に、「EQをどう定義するか?」という問題である。例えば、EQを「センス (感性)」だと考えれば、それは「持って生まれた才能」に近いものであり、ほんのわずかなトレーニングで磨かれうるようなものではないということになる。またEQを「性格特性」だとするならば、その人のEQは個性ということになり、それを変えるか否かは個人の自由だということになる。これではEQを高めることの意味がわからなくなる。その一方で、EQを「発達可能な感

情面での知的能力 (Intelligence)」として想定するのであれば、情動面での知的能力が豊かになるためのトレーニングを実施すればよいということになる。ところが多くの心理学者たちは、EQの発達モデルに対して懐疑的である。例えば、知能 (Intelligence) をめぐる議論の中で、村上は「… EQ関係の本もある。これはダニエル・ゴールマンの『EQ－こころの知能指数』(講談社、1996年)を契機に、続々と現れた。知能指数ではなく、共感能力などの情動も大事だという本で、知能の本ではない。共感能力が高ければ高いほど良いという仮説に立っている。そのため“共感”を呼んで流行したのかもしれない。しかし、共感能力が高すぎると、他人の影響を受けやすく、自立した思考が妨げられてしまう。また、共感能力を必要とする職場も一部にすぎない。つまり、共感能力が高ければ高いほど良いという仮説は誤りである。ちょっと考えればすぐにわかることだ。」(村上 [2007:9])と述べ、EQを一蹴している。というわけで、この問いに答えられるだけの理論的基盤はいまだに整備できないままである。

第2に、「EQを高めるためにどのようなトレーニングを行うか?」をめぐるとの問題である。というのは、上述のように「EQとは何か」が曖昧であっても、教授学的理論 (コンピテンシーモデル) や実施計画 (プログラム) がしっかりしてさえいれば、いかなるトレーニングや研修のプログラムも「EQ教育」と称して実施できてしまうのである (卜部 [2008]、イライアスほか [1999])。実際、本学のようにEQを「社会人基礎力」として、あるいは「コンピテンシー (高業績者に備わる資質・能力)」として設定し、例えば、どの分野にも応用できるような「プレゼンテーション能力」や「コミュニケーション能力」を育成するためのプログラムを実施するとか、あるいは「興奮」と「感動」が得られるような野外活動やキャンプといったプログラムを企画・運営すれば、なんとなくEQ教育プログラムが実施できているように思えてしまうのである。これはこれでよいのかもしれないが、あまり学問的な議論を踏まえた実践ではないという点が問題である。

第3に、「EQをどう測定するか?」という問題である。「EQ教育プログラ

2010年12月 川内健悟、大西智子、松尾真一郎、卜部匡司：大学生のEQ教育における評価方法に関する基礎的研究  
ム」が教育活動である以上、そのプログラムの教育効果を測定する必要があるのは言うまでもない。最も理想的なのは、学生のEQがどのように成長したのかが数値で客観的に判別できるようになることである。ところが、学生のEQを客観的に測定できるツールの開発はいまだに不十分である。またEQの場合、厄介なことに「それを数値で測定して何になるのか？」と問われても説得力のある回答が出しにくい。むしろEQと言えば「感情（情動）」なのだから、EQのトレーニングに参加した学生たちがトレーニング修了後に「感激の涙」を見たかどうかで教育プログラムの成否を判断すればよいではないか。こう考えるのもよいであろう。しかし、これもあまり学問的な議論ではない。

これら3つの難題を踏まえ、本稿で挑戦するのは第3の問題である。すなわち「EQをどう測定するか？」という問いに答えるべく、大学生のEQを測定するために必要な評価の枠組みを模索する。

EQ教育の導入以来、徳山大学でも大学生のEQを測定するための手がかりとして、例えば「LIFO（ビジネスコンサルタント）」や「エゴグラム診断」など、質問紙による診断ツールを活用してきた。「LIFO」は、行動科学に基づいて個人の指向性や行動スタイルから個人の「強み」を明らかにする自己診断ツールであり、他方の「エゴグラム診断」は、周知の通り、個人の性格特性の診断に用いられるツールである（例えば、津田 [2004] など）。しかしながら、これらの診断ツールは、「感情」に焦点を当てたEQの測定ツールとしては若干の外れであると言わざるを得ない。

そこで本稿では、「組織感情マップ」のモデルを手がかりに、それが大学生のEQを測定できるモデルとして援用できるのか否か。またそのモデルに依拠したとき、本学学生の「感情」はどのような傾向を備えたものとして浮かび上がってくるのか。これらについて実証的に明らかにする。具体的な手順としては、第1に、理論的背景や研究仮説、調査の概要など、研究の枠組みについて述べる。このとき「組織感情マップ」というモデルを手がかりとし、これに改良を加えて「EQマップ」を構築する。第2に、この「EQマップ」は大学生の感情を測定するモデルとなりうるのか。モデルの適合度について検証する。そ

して第3に、本学の学生は実際にどのような感情を抱いているのか。その傾向について分析し、若干の考察を加える。

## I. 調査の枠組み

### 1. 理論的背景：「組織感情マップ」

本稿で手がかりとする「組織感情マップ」とは、「組織の感情の状態を知るための手段」であり、「組織の感情がどのように広がっているのか、どのような感情を組織が持っているのかということを正確に把握するためのもの」である（野田稔、ジェイフィール [2009:49]；高橋 [2009:17]）。ここで言う「組織感情」とは「組織全体に波及した空気、気分、ムード」であり、いわば「個々人の感情が連鎖し、組織全体の感情として広がってしまった状態」である（野田稔、ジェイフィール [2009:46]）。このとき「感情」とは、「出来事に対する心理的・身体的反応（情緒）に対して、何らかの意味付けをした状態」である（野田稔、ジェイフィール [2009:46-48]）。

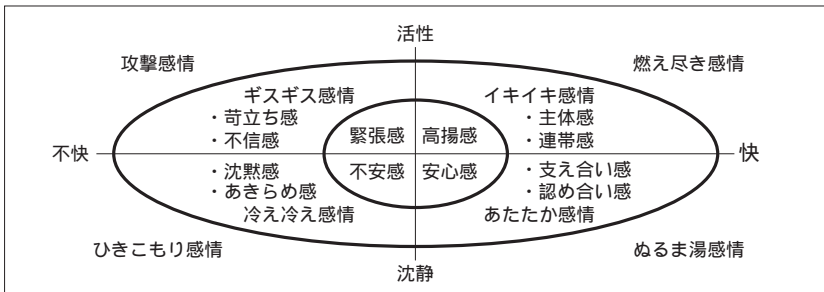
実際、「組織感情マップ」が開発された背景には、次のような事情がある。すなわち、昨今の職場では、情緒的判断を廃し、論理的・理性的に判断することを志向してきたため、直感力や発想力、感じる力が弱ってしまった。しかし、すべての制度の歯車が正しく回るためには、そのど真ん中に、「正しい組織感情」という歯車がなくてはならない（野田稔、ジェイフィール [2009:9-15]）。こうした職場の感情問題を解決するためのツールが「組織感情マップ」というわけである。

「組織感情マップ」では、「感情」が「快-不快」および「活性-沈静」の2軸で分類される（図1参照）。そのうえで4つの各象限の「感情」（適正範囲内）が規定されている。すなわち、「イキイキ感情」、「あたたか感情」、「ギスギス感情」、「冷え冷え感情」である（高橋 [2009:22-29]）。さらに、これら4つの感情が各象限内で3つに分類される。このとき、図1の中心にある4つの「感情」が、各象限の基本感情（「高揚感」、「安心感」、「緊張感」、「不安感」）である。そして各象限ごとのさらに2つずつある感情の大きさが、組織や個人の

2010年12月 川内健悟、大西智子、松尾真一郎、卜部匡司：大学生のEQ教育における評価方法に関する基礎的研究  
 行動に影響を与えると想定する。例えば、「主体感」や「連帯感」が「イキイキ感情」を活性化するというわけである。他方、このモデルでは、4象限の外縁に「感情崩壊ライン」を設け、このラインを超えてしまうと「感情のコントロールができない状態」（適正範囲外の感情）になると考える。例えば、「あたたか感情」が強くなりすぎれば、馴れ合い状態のような「ぬるま湯感情」が生まれてしまう。こうした適正範囲外の感情は、周囲や自分を傷つけてしまう方向に作用する可能性が高く、早急に適正範囲内まで調整する必要があると考えられている（野田稔、ジェイフィール [2009:52-55]）。なお、これらの感情を概念的に整理したのが、以下の表1である。

表1：組織感情マップの基本概念

適正範囲内の感情	基本感情	具体的な感情	適正範囲外の感情
イキイキ感情 = 快感情 × 活性状態	高揚感	主体感・連帯感	燃え尽き感情
あたたか感情 = 快感情 × 沈静状態	安心感	支え合い感・認め合い感	ぬるま湯感情
ギスギス感情 = 不快感情 × 活性状態	緊張感	苛立ち感・不信感	攻撃感情
冷え冷え感情 = 不快感情 × 沈静状態	不安感	沈滞感・あきらめ感	ひきこもり感情



出典：高橋克徳『職場は感情で変わる』講談社現代新書、2009年、18頁。

図1：組織感情マップ

## 2. 研究仮説：「EQマップ」

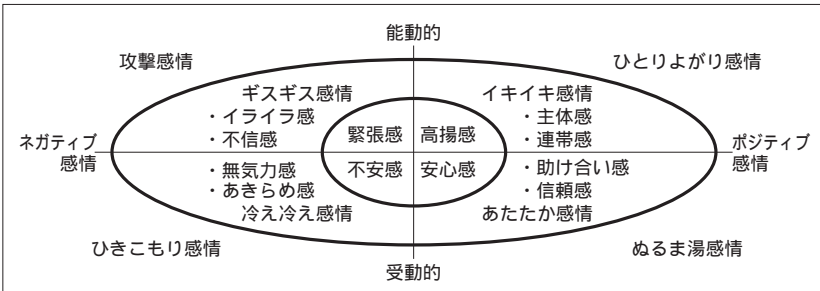
先の「組織感情マップ」は、主に企業の「組織感情」を測定するためのツールとして開発されたため、このモデルをそのまま大学生のEQ測定に適用する

ことはできない。したがって、このモデルを手がかりとしながらも、大学生のEQを測定するためのツールの開発を目指してさらに改良を加える必要がある。実際、大学は企業とは異なる性質を備えた組織であるため、「組織感情」の測定よりは、むしろ大学生の個人的な感情傾向のマッピングに活用したほうがよいのではないかと考えた。それゆえ「組織感情マップ」のうち、概念の一部を以下のように改良し「EQマップ」と命名した（表2および図2参照）。

表2：「EQマップ」の基本概念

適正範囲内の感情	基本感情	具体的な感情	適正範囲外の感情
イキイキ感情 = ポジティブ×能動的	高揚感	主体感・連帯感	ひとりよがり感情
あたたか感情 = ポジティブ×受動的	安心感	助け合い感・信頼感	ぬるま湯感情
ギスギス感情 = ネガティブ×能動的	緊張感	苛立ち感・不信感	攻撃感情
冷え冷え感情 = ネガティブ×受動的	不安感	無気力感・あきらめ感	ひきこもり感情

筆者作成



筆者作成

図2：EQマップ

まず「EQマップ」では、「感情」の2軸（「快-不快」および「活性-沈静」）の表現を大学生の状況に合わせて「ポジティブ-ネガティブ」および「能動的-受動的」で言い換えた。そして、「燃え尽き感情」を「ひとりよがり感情」に、「支え合い感」を「助け合い感」に、「認め合い感」を「信頼感」に、「沈滞感」を「無気力感」に、それぞれ書き換えた。

### 3. 調査の概要

上述の理論的枠組みをもとに、「EQマップ」のモデルの適合度を検証し、さらには大学生の感情傾向（EQ）を探るため、2010年1～2月に本学学生200名を対象とした質問紙調査を実施した。

まず、調査項目のうち個人的属性として、次の6項目について質問した。すなわち、①「性別」、②「学年」、③「学部学科」、④「入試形態」、⑤「部活動」、

表3：EQマップにおける尺度と項目事例

	尺 度	項 目 事 例
軸の直交	イキイキ感情 vs 冷え冷え感情	「あなたはいつもどのような気持ちで大学の授業を受けていますか？」 回答形式（4段階）： 1（ハイテンションな気持ちで）～4（投げやりな気持ちで）
	ぬるま湯感情 vs 攻撃感情	「あなたはいつもどのような気持ちで大学の授業を受けていますか？」 回答形式（4段階）： 1（リラックスした気持ちで）～4（イライラした気持ちで）
適正範囲内の感情	イキイキ感情 （3項目）	「私は大学でいつも授業をいきいきと楽しく受けていると思う。」 回答形式（6段階）：1（全くそう思わない）～6（全くそう思う）
	あたたか感情 （3項目）	「仲間と和気あいあい授業を受けていると思う。」 回答形式（6段階）：1（全くそう思わない）～6（全くそう思う）
	ギスギス感情 （3項目）	「私は他人が何を考えて授業を受けているかわからずいつも不信に思う。」 回答形式（6段階）：1（全くそう思わない）～6（全くそう思う）
	冷え冷え感情 （3項目）	「授業の内容が理解できず、この先のことを考えるといつも不安に思う。」 回答形式（6段階）：1（全くそう思わない）～6（全くそう思う）
適正範囲外の感情	ひとりよがり感情 （2項目）	「私は何が何でも『優』の成績をもらわなければならないと思う。」 回答形式（6段階）：1（全くそう思わない）～6（全くそう思う）
	ぬるま湯感情 （3項目）	「たとえ試験の成績が悪くて単位が危なくても、最後には教員が何とかしてくれる。」 回答形式（6段階）：1（全くそう思わない）～6（全くそう思う）
	攻撃感情 （2項目）	「授業の内容がわからないのは、絶対に教員のせいだと思う。」 回答形式（6段階）：1（全くそう思わない）～6（全くそう思う）
	ひきこもり感情 （2項目）	「いつもひとりぼっちで不安なまま孤独に授業を受けざるをえないものだと思う。」 回答形式（6段階）：1（全くそう思わない）～6（全くそう思う）

⑥「希望進路」である。さらに、「EQマップ」の各概念を調査項目として、「大学の授業における感情状態」ならびに「部活動や余暇活動における感情状態」に焦点を当てて、次のような尺度を設定した（表3参照）。まず各象限の軸を直交させた2項目（「イキイキ感情vs冷え冷え感情」および「ぬるま湯感情vs攻撃感情」）を設定し、それぞれ4段階の回答形式で質問した。次に、適正範囲内の4つの感情についてそれぞれ3項目、さらに適正範囲外の4つの感情についてそれぞれ2項目を設定し、いずれも6段階の回答形式で質問した。

なお、データ分析の方法としては、第1に「大学の授業における感情状態」および「部活動や余暇活動における感情状態」について、それぞれ因子分析を行い、モデルの適合度を明らかにした。そして第2に、「回答者の特性（学年、学部学科、部活動、入試形態、進路希望）」に注目して、それぞれ一元配置分散分析を行い、本学における大学生の感情傾向を解明した。

## Ⅱ. 「EQマップ」は大学生の感情を測定するモデルとなるか？

まず「EQマップ」が大学生の感情を測定するモデルとして適しているかどうか調べるため、「大学の授業における感情状態」および「部活動や余暇活動における感情状態」について、それぞれ因子分析（主因子法）を行った。もしこのモデルが安定しているならば、いずれも因子の傾向が類似したものとなるはずである。

### 1. 大学の授業における感情状態

第1に、「大学の授業における感情状態」について因子分析を行った。その結果、6つの因子が確認された（表4参照）。

ところが、例えば「ひとりよがり感情」と「ギスギス感情」が同一因子となるとか、「無力感」と「イライラ感」が同一因子となるなど、「EQマップ」（図2）の区分とは異なる分類（相関関係）が見られる。さらに、これら6つの因子が説明できる確率は45.374%であり（表5参照）、「大学の授業における感情状態」については因子の説明力が不十分であるということがわかる。



表4：回転後の因子行列（大学授業）<sup>a</sup>

	因子					
	1	2	3	4	5	6
イキイキ感情	0.754	0.055	-0.134	-0.110	-0.035	-0.146
信頼感	0.695	0.265	-0.062	-0.048	0.011	0.127
連帯感	0.604	0.325	-0.080	0.025	-0.079	-0.090
あたたか感情	0.584	-0.181	-0.012	0.027	0.337	0.038
助け合い感	0.530	0.195	-0.219	-0.014	0.311	0.156
主体感	0.523	0.262	-0.064	0.118	-0.328	0.214
ぬるま湯感情	0.337	-0.065	0.134	-0.234	0.078	-0.263
ひとりよがり感情	0.147	0.767	-0.255	0.075	0.060	0.051
ギスギス感情	0.112	0.672	0.048	0.095	0.013	0.101
ひとりよがり感情	0.198	0.569	0.103	-0.009	0.139	0.088
あきらめ感	-0.124	-0.090	0.653	0.207	0.187	0.016
ぬるま湯感情	-0.005	0.028	0.584	0.185	-0.162	0.009
ひきこもり感情	-0.086	-0.158	0.482	-0.042	0.204	0.228
無気力感	-0.275	-0.059	0.424	0.208	0.285	-0.021
イライラ感	0.112	0.198	0.348	0.094	0.226	0.229
ひきこもり感情	-0.122	0.229	0.290	0.057	-0.040	0.083
攻撃感情	-0.032	0.024	0.209	0.878	0.119	0.028
攻撃感情	-0.032	0.136	0.257	0.464	-0.005	0.043
冷え冷え感	0.083	0.243	0.137	0.079	0.475	0.039
情不信感	0.035	0.193	0.242	0.033	0.049	0.614

因子抽出法：主因子法

回転法：Kaiserの正規化を伴うバリマックス法

a. 12回の反復で回転が収束しました。

表5：説明された分散の合計（大学授業）

因子	初期の固有値			抽出後の負荷量平方和			回転後の負荷量平方和		
	合計	分散の%	累積%	合計	分散の%	累積%	合計	分散の%	累積%
1	3.915	19.575	19.575	3.440	17.198	17.198	2.635	13.174	13.174
2	3.020	15.100	34.675	2.472	12.359	29.557	1.931	9.655	22.829
3	1.781	8.907	43.582	1.271	6.357	35.913	1.749	8.744	31.572
4	1.275	6.375	49.957	0.797	3.983	39.896	1.226	6.132	37.705
5	1.176	5.878	55.835	0.628	3.141	43.037	0.834	4.171	41.875
6	1.070	5.350	61.184	0.467	2.337	45.374	0.700	3.499	45.374
7	0.958	4.788	65.972						
8	0.861	4.307	70.279						
9	0.715	3.576	73.855						
10	0.702	3.508	77.363						
11	0.694	3.470	80.832						
12	0.578	2.888	83.720						
13	0.538	2.688	86.409						
14	0.505	2.523	88.932						
15	0.439	2.193	91.125						
16	0.395	1.973	93.097						
17	0.378	1.888	94.985						
18	0.361	1.803	96.788						
19	0.350	1.751	98.539						
20	0.292	1.461	100.000						

因子抽出法：主因子法

## 2. 部活動や余暇活動における感情状態

第2に「部活動や余暇活動における感情状態」について因子分析を行った。その結果、5つの因子が確認された(表6参照)。

しかし、先の分析(表4)と同様に、「EQマップ」(図2)の区分とは異なる分類(相関関係)が見られるどころか、各因子に含まれる項目が「大学の授業における感情状態」と「部活動や余暇活動における感情状態」とでは若干異なっていることがわかった。また、これら5つの因子が説明できる確率は45.869%であり(表7参照)、こちらも因子の説明力が不十分であることがわかる。

表6：回転後の因子行列(部活余暇)<sup>a</sup>

	因子				
	1	2	3	4	5
攻撃感情	0.712	0.138	-0.094	0.025	0.053
あきらめ感	0.653	-0.203	-0.014	-0.177	0.223
ぬるま湯感情	0.565	-0.056	0.107	-0.415	0.031
不信感	0.551	-0.111	-0.156	0.209	0.057
ひきこもり感情	0.533	-0.062	-0.190	0.042	0.157
イライラ感	0.523	0.149	0.000	0.217	0.059
無気力感	0.514	-0.103	-0.377	-0.034	-0.003
冷え冷え感情	0.494	0.086	-0.225	-0.018	-0.315
主体感	-0.007	0.621	0.073	0.268	-0.061
助け合い感	-0.098	0.599	0.430	0.074	-0.108
信頼感	-0.124	0.596	0.360	-0.020	-0.133
ギスギス感情	0.297	0.548	0.000	0.327	0.104
連帯感	-0.314	0.536	0.207	0.037	-0.125
攻撃感情	0.288	0.413	-0.197	0.098	0.061
イキイキ感情	-0.282	0.168	0.742	0.176	-0.023
あたたか感情	-0.217	0.269	0.697	-0.002	-0.208
ぬるま湯感情	0.025	0.014	0.534	-0.067	0.158
ひとりよがり感情	0.076	0.216	0.054	0.519	0.067
ひきこもり感情	0.368	-0.021	0.007	0.130	0.577
ひとりよがり感情	0.023	0.223	0.025	0.412	-0.416

因子抽出法: 主因子法

回転法: Kaiserの正規化を伴うバリマックス法

a. 9回の反復で回転が収束しました。

表7：説明された分散の合計（部活余暇）

因子	初期の固有値			抽出後の負荷量平方和			回転後の負荷量平方和		
	合計	分散の%	累積%	合計	分散の%	累積%	合計	分散の%	累積%
1	4.707	23.534	23.534	4.212	21.058	21.058	3.186	15.932	15.932
2	3.152	15.762	39.296	2.606	13.029	34.087	2.174	10.870	26.801
3	1.738	8.689	47.985	1.208	6.039	40.126	2.000	10.001	36.802
4	1.251	6.253	54.238	0.699	3.493	43.619	0.986	4.932	41.734
5	1.036	5.178	59.416	0.450	2.250	45.869	0.827	4.136	<b>45.869</b>
6	0.951	4.754	64.170						
7	0.857	4.287	68.456						
8	0.713	3.564	72.020						
9	0.672	3.362	75.382						
10	0.634	3.169	78.551						
11	0.614	3.068	81.619						
12	0.556	2.778	84.397						
13	0.506	2.532	86.929						
14	0.454	2.269	89.198						
15	0.421	2.105	91.303						
16	0.412	2.059	93.362						
17	0.387	1.937	95.299						
18	0.359	1.796	97.095						
19	0.311	1.555	98.650						
20	0.270	1.350	100.000						

因子抽出法：主因子法

以上のことから、「EQマップ」は大学生の感情を測定するモデルとしては不十分であると考えられる。

### Ⅲ. 調査結果から見えてくる大学生の感情傾向

次いで、モデルの適性にはこだわらず、回答者の特性と測定結果との間にあるような関係があるかについて考察した。このとき「回答者の特性」として「学年」、「学部学科」、「入試形態」、「部活動」、「希望進路」に焦点をあて、一元配置分散分析を行った。

#### 1. 「学年」による感情傾向の違い（表8～9参照）

第1に「学年」による感情傾向において特徴的なのは、次の4点である。

表8：分散分析（学年別）

分散分析		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
大学授業： ひとりよがり感情	グループ間	26.774	3	8.925	3.836	0.011
	グループ内	449.023	193	2.327		
	合計	475.797	196			
大学授業： ぬるま湯感情	グループ間	12.836	3	4.279	2.758	0.044
	グループ内	297.873	192	1.551		
	合計	310.709	195			
大学授業： 助け合い感	グループ間	12.232	3	4.077	2.841	0.039
	グループ内	276.986	193	1.435		
	合計	289.218	196			
部活余暇： 主体感	グループ間	20.248	3	6.749	3.879	0.010
	グループ内	334.053	192	1.740		
	合計	354.301	195			

- ① 「ひとりよがり感情」：他学年と比べて特に2年生は何か何でも「優」の成績を取得すべきだと考えている。
- ② 「ぬるま湯感情」：学年が上がるにつれて授業に不満を感じる傾向にある。
- ③ 「助け合い感」：学年が上がるにつれて授業での教え合いが少ないと感じている。
- ④ 「主体感」：他学年と比べて特に2年生は部活動に主体的に取り組んでいるとは思っていない。

表9：記述統計（学年別）

記述統計		度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の95%信頼区間		最小値	最大値
						下限	上限		
大学授業： ひとりよがり感情	1年生	23	3.478	1.163	0.242	2.975	3.981	1	6
	2年生	63	3.286	1.529	0.193	2.901	3.671	1	6
	3年生	95	4.011	1.581	0.162	3.688	4.333	1	6
	4年生	16	4.313	1.621	0.405	3.448	5.177	2	6
	合計	197	3.741	1.558	0.111	3.522	3.960	1	6
大学授業： ぬるま湯感情	1年生	23	3.043	1.261	0.263	2.498	3.589	1	5
	2年生	62	3.097	1.127	0.143	2.811	3.383	1	6
	3年生	95	3.505	1.304	0.134	3.240	3.771	1	6
	4年生	16	3.875	1.310	0.328	3.177	4.573	2	6
	合計	196	3.352	1.262	0.090	3.174	3.530	1	6
大学授業： 助け合い感	1年生	23	2.957	0.878	0.183	2.577	3.336	2	5
	2年生	63	3.444	1.215	0.153	3.138	3.750	1	6
	3年生	95	3.547	1.244	0.128	3.294	3.801	1	6
	4年生	16	4.063	1.237	0.309	3.404	4.721	2	6
	合計	197	3.487	1.215	0.087	3.317	3.658	1	6
部活余暇： 主体感	1年生	23	3.435	1.037	0.216	2.986	3.883	2	6
	2年生	63	4.048	1.197	0.151	3.746	4.349	1	6
	3年生	94	3.340	1.418	0.146	3.050	3.631	1	6
	4年生	16	3.813	1.515	0.379	3.005	4.620	1	6
	合計	196	3.617	1.348	0.096	3.427	3.807	1	6

2. 「学部学科」による感情傾向の違い（表10～11参照）

第2に「学部学科」による感情傾向において特徴的なのは、次の8点である。

表10：分散分析（学部学科別）

分散分析		平方和	自由度	平均平方	F値	有意確率
大学授業： あたたか感情	グループ間	21.391	4	5.348	3.459	0.009
	グループ内	295.303	191	1.546		
	合計	316.694	195			
大学授業： ひとりよがり感情	グループ間	33.001	4	8.250	3.592	0.008
	グループ内	438.729	191	2.297		
	合計	471.730	195			
部活余暇： ギスギス感情	グループ間	23.114	4	5.778	3.402	0.010
	グループ内	324.412	191	1.698		
	合計	347.526	195			
部活余暇： 連帯感	グループ間	21.366	4	5.341	3.584	0.008
	グループ内	284.634	191	1.490		
	合計	306.000	195			
部活余暇： ぬるま湯感情	グループ間	24.129	4	6.032	3.868	0.005
	グループ内	297.871	191	1.560		
	合計	322.000	195			
部活余暇： 主体感	グループ間	37.436	4	9.359	5.603	0.000
	グループ内	317.364	190	1.670		
	合計	354.800	194			
部活余暇： 信頼感	グループ間	21.249	4	5.312	3.952	0.004
	グループ内	256.711	191	1.344		
	合計	277.959	195			
部活余暇： 攻撃感情	グループ間	15.123	4	3.781	3.608	0.007
	グループ内	200.142	191	1.048		
	合計	215.265	195			

- ①「あたたか感情」：スポーツマネジメントコースの学生は相対的に和気あいあいと授業を受けていると感じている。
- ②「ひとりよがり感情」：ビジネス戦略コースの学生は相対的に何が何でも「優」の成績を取得すべきだと考えている。
- ③「ギスギス感情」：知財開発コースの学生は相対的に部活動や余暇活動において仲間とのギスギス感が少ないと感じている。
- ④「連帯感」：スポーツマネジメントコースの学生は相対的に部活動や余暇活動において連帯感を強く感じている。
- ⑤「ぬるま湯感情」：知財開発コースの学生は相対的に部活動や余暇活動において、自分が頑張らなくとも誰かが何とかしてくれると思う傾向にある。

表11：記述統計（学部学科別）

記述統計		度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の95%信頼区間		最小値	最大値
						下限	上限		
大学授業： あたたか感情	現代経済	45	3.644	1.433	0.214	3.214	4.075	1	6
	ビジネス戦略	18	3.222	1.517	0.358	2.468	3.977	1	6
	知財開発	11	3.000	1.549	0.467	1.959	4.041	1	6
	スポマネ	108	2.889	1.071	0.103	2.685	3.093	1	6
	福祉情報	14	2.643	1.216	0.325	1.941	3.345	1	5
	合計	196	3.082	1.274	0.091	2.902	3.261	1	6
大学授業： ひとりよがり感情	現代経済	45	3.378	1.642	0.245	2.885	3.871	1	6
	ビジネス戦略	18	2.778	1.801	0.424	1.882	3.673	1	6
	知財開発	11	4.091	1.446	0.436	3.119	5.062	1	6
	スポマネ	108	4.028	1.475	0.142	3.746	4.309	1	6
	福祉情報	14	3.643	0.929	0.248	3.107	4.179	2	5
	合計	196	3.740	1.555	0.111	3.521	3.959	1	6
部活余暇： ギスギス感情	現代経済	45	4.111	1.352	0.202	3.705	4.517	1	6
	ビジネス戦略	18	3.167	1.098	0.259	2.621	3.713	2	5
	知財開発	11	4.909	1.221	0.368	4.089	5.729	3	6
	スポマネ	108	3.852	1.317	0.127	3.601	4.103	1	6
	福祉情報	14	3.929	1.328	0.355	3.162	4.695	2	6
	合計	196	3.913	1.335	0.095	3.725	4.101	1	6
部活余暇： 連帯感	現代経済	45	2.911	1.125	0.168	2.573	3.249	1	6
	ビジネス戦略	18	3.444	1.149	0.271	2.873	4.016	2	6
	知財開発	11	3.727	1.348	0.407	2.821	4.633	1	6
	スポマネ	108	2.620	1.258	0.121	2.380	2.860	1	6
	福祉情報	14	3.071	1.207	0.322	2.375	3.768	1	6
	合計	196	2.857	1.253	0.089	2.681	3.034	1	6
部活余暇： ぬるま湯感情	現代経済	45	4.111	1.402	0.209	3.690	4.532	1	6
	ビジネス戦略	18	4.000	1.188	0.280	3.409	4.591	2	6
	知財開発	11	3.636	1.748	0.527	2.462	4.811	1	6
	スポマネ	108	4.722	1.159	0.111	4.501	4.943	1	6
	福祉情報	14	4.357	1.008	0.269	3.775	4.939	3	6
	合計	196	4.429	1.285	0.092	4.248	4.610	1	6
部活余暇： 主体感	現代経済	45	3.800	1.236	0.184	3.429	4.171	1	6
	ビジネス戦略	18	3.778	0.878	0.207	3.341	4.214	3	6
	知財開発	11	5.091	0.831	0.251	4.532	5.649	4	6
	スポマネ	107	3.299	1.382	0.134	3.034	3.564	1	6
	福祉情報	14	3.857	1.460	0.390	3.014	4.700	1	6
	合計	195	3.600	1.352	0.097	3.409	3.791	1	6
部活余暇： 信頼感	現代経済	45	2.867	1.254	0.187	2.490	3.243	1	6
	ビジネス戦略	18	3.111	1.231	0.290	2.499	3.723	1	6
	知財開発	11	4.000	1.183	0.357	3.205	4.795	2	6
	スポマネ	108	2.704	1.096	0.105	2.495	2.913	1	6
	福祉情報	14	3.357	1.216	0.325	2.655	4.059	1	6
	合計	196	2.898	1.194	0.085	2.730	3.066	1	6
部活余暇： 攻撃感情	現代経済	45	4.800	1.100	0.164	4.470	5.130	2	6
	ビジネス戦略	18	4.167	1.150	0.271	3.595	4.739	2	6
	知財開発	11	5.273	0.786	0.237	4.745	5.801	4	6
	スポマネ	108	5.065	1.016	0.098	4.871	5.259	1	6
	福祉情報	14	5.143	0.770	0.206	4.698	5.588	3	6
	合計	196	4.939	1.051	0.075	4.791	5.087	1	6

- ⑥「主体感」：スポーツマネジメントコースの学生は相対的に部活動や余暇活動に主体的に取り組む傾向にある。
- ⑦「信頼感」：スポーツマネジメントコースの学生は相対的に部活動や余暇活動で仲間の良さや個性を尊重する傾向にある。
- ⑧「攻撃感情」：ビジネス戦略コースの学生は相対的に、部活動や余暇活動でうまくいかないのは他人のせいだと考えている。

3. 「入試形態」による感情傾向の違い（表12～13参照）

第3に「入試形態」による感情傾向において特徴的なのは、次の2点である。

- ①「ひきこもり感情」：一般入試で入学した学生は相対的に、部活動や余暇活動のメンバーとは深く関わらないようにしようと考えている。
- ②「攻撃感情」：その他の理由で入学した学生は、部活動や余暇活動での攻撃感情が高いという傾向が見られる。

表12：分散分析（入試形態別）

分散分析		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
部活余暇：	グループ間	36.287	4	9.072	5.945	0.000
ひきこもり感情	グループ内	291.442	191	1.526		
	合計	327.730	195			
部活余暇：	グループ間	26.586	4	6.646	3.114	0.016
攻撃感情	グループ内	407.659	191	2.134		
	合計	434.245	195			

表13：記述統計（入試形態別）

記述統計	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の95%信頼区間		最小値	最大値	
					下限	上限			
部活余暇：	推薦入試	71	4.423	1.191	0.141	4.141	4.704	1	6
ひきこもり感情	AO入試	63	4.540	1.255	0.158	4.224	4.856	1	6
	一般入試	28	3.250	1.143	0.216	2.807	3.693	1	5
	センター利用	11	4.000	1.183	0.357	3.205	4.795	2	6
	その他	23	4.348	1.434	0.299	3.728	4.968	1	6
	合計	196	4.260	1.296	0.093	4.078	4.443	1	6
部活余暇：	推薦入試	71	4.070	1.356	0.161	3.750	4.391	1	6
攻撃感情	AO入試	63	3.667	1.576	0.199	3.270	4.064	1	6
	一般入試	28	3.929	1.585	0.300	3.314	4.543	1	6
	センター利用	11	3.636	1.120	0.338	2.884	4.389	2	6
	その他	23	2.870	1.424	0.297	2.254	3.485	1	6
	合計	196	3.755	1.492	0.107	3.545	3.965	1	6

## 4. 「部活動」による感情傾向の違い（表14～15参照）

第4に「部活動」による感情傾向において特徴的なのは、次の5点である。

- ①「ひきこもり感情」：どの部活動にも所属していない学生は、授業中に孤独感を感じやすい。
- ②「あきらめ感」：無所属の学生および体育系強化部の一部の学生は相対的に、部活動や余暇活動に取り組んでも何も変わらないと考えている。
- ③「ぬるま湯感情」：体育系の準強化団体（軟式野球部やフットサル部など）の学生は相対的に部活動や余暇活動において特に不満はなく、また文化系クラブの学生は相対的に、自分が頑張らなくとも誰かが何とかしてくれると思う傾向にある。
- ④「連帯感」：体育系クラブの学生は一部を除いて全体的に部活動や余暇活動において連帯感を強く感じている。
- ⑤「攻撃感情」および「ひきこもり感情」：無所属の学生および体育系強化部の一部の学生は相対的に、部活動や余暇活動でうまくいかないのは他人のせいだと考え、活動中に孤独を感じる傾向にある。

表 14：分散分析（部活動別）

分散分析		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
大学授業： ひきこもり感情	グループ間	24.269	5	4.854	3.404	0.006
	グループ内	276.611	194	1.426		
	合計	300.880	199			
部活余暇： あきらめ感	グループ間	43.591	5	8.718	6.435	0.000
	グループ内	260.132	192	1.355		
	合計	303.722	197			
部活余暇： ぬるま湯感情	グループ間	30.325	5	6.065	3.183	0.009
	グループ内	365.882	192	1.906		
	合計	396.207	197			
部活余暇： 連帯感	グループ間	52.700	5	10.540	7.852	0.000
	グループ内	260.420	194	1.342		
	合計	313.120	199			
部活余暇： ぬるま湯感情	グループ間	42.887	5	8.577	5.639	0.000
	グループ内	295.113	194	1.521		
	合計	338.000	199			
部活余暇： 攻撃感情	グループ間	18.459	5	3.692	3.399	0.006
	グループ内	210.736	194	1.086		
	合計	229.195	199			
部活余暇： ひきこもり感情	グループ間	36.094	5	7.219	4.317	0.001
	グループ内	324.386	194	1.672		
	合計	360.480	199			



表 15：記述統計（部活動別）

記述統計	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の95%信頼区間		最小値	最大値	
					下限	上限			
大学授業： ひきこもり感情	体育系強化球技系	58	4.966	0.816	0.107	4.751	5.180	2	6
	体育系強化格闘技系	22	4.864	1.082	0.231	4.384	5.343	3	6
	体育系強化その他	23	4.435	1.308	0.273	3.869	5.001	2	6
	体育系準強化	11	5.455	0.820	0.247	4.904	6.006	4	6
	文化系団体	12	4.750	1.357	0.392	3.888	5.612	1	6
	無所属	74	4.297	1.431	0.166	3.966	4.629	1	6
	合計	200	4.660	1.230	0.087	4.489	4.831	1	6
部活余暇： あきらめ感	体育系強化球技系	58	4.931	1.057	0.139	4.653	5.209	2	6
	体育系強化格闘技系	22	5.636	0.581	0.124	5.379	5.894	4	6
	体育系強化その他	23	4.391	1.438	0.300	3.770	5.013	1	6
	体育系準強化	11	5.455	0.934	0.282	4.827	6.082	3	6
	文化系団体	12	4.667	0.888	0.256	4.103	5.231	3	6
	無所属	72	4.278	1.335	0.157	3.964	4.591	1	6
	合計	198	4.722	1.242	0.088	4.548	4.896	1	6
部活余暇： ぬるま湯感情	体育系強化球技系	57	3.912	1.313	0.174	3.564	4.261	1	6
	体育系強化格闘技系	22	3.682	1.359	0.290	3.079	4.284	1	6
	体育系強化その他	23	4.043	1.224	0.255	3.514	4.573	2	6
	体育系準強化	11	2.727	1.555	0.469	1.683	3.772	1	5
	文化系団体	12	3.917	1.311	0.379	3.083	4.750	2	6
	無所属	73	3.219	1.465	0.171	2.877	3.561	1	6
	合計	198	3.581	1.418	0.101	3.382	3.780	1	6
部活余暇： 連帯感	体育系強化球技系	58	2.310	0.883	0.116	2.078	2.542	1	5
	体育系強化格闘技系	22	2.318	1.211	0.258	1.781	2.855	1	5
	体育系強化その他	23	3.348	1.335	0.278	2.770	3.925	1	6
	体育系準強化	11	2.364	0.924	0.279	1.743	2.985	1	3
	文化系団体	12	3.417	1.311	0.379	2.583	4.250	1	6
	無所属	74	3.338	1.274	0.148	3.043	3.633	1	6
	合計	200	2.880	1.254	0.089	2.705	3.055	1	6
部活余暇： ぬるま湯感情	体育系強化球技系	58	4.569	1.156	0.152	4.265	4.873	1	6
	体育系強化格闘技系	22	5.273	0.703	0.150	4.961	5.584	4	6
	体育系強化その他	23	4.783	1.313	0.274	4.215	5.350	3	6
	体育系準強化	11	4.727	1.421	0.428	3.773	5.682	1	6
	文化系団体	12	3.917	1.311	0.379	3.083	4.750	2	6
	無所属	74	3.919	1.342	0.156	3.608	4.230	1	6
	合計	200	4.400	1.303	0.092	4.218	4.582	1	6
部活余暇： 攻撃感情	体育系強化球技系	58	5.224	0.859	0.113	4.998	5.450	1	6
	体育系強化格闘技系	22	5.136	0.889	0.190	4.742	5.530	3	6
	体育系強化その他	23	4.739	1.214	0.253	4.214	5.264	2	6
	体育系準強化	11	5.364	0.809	0.244	4.820	5.907	4	6
	文化系団体	12	4.917	0.900	0.260	4.345	5.489	3	6
	無所属	74	4.568	1.195	0.139	4.291	4.844	2	6
	合計	200	4.905	1.073	0.076	4.755	5.055	1	6
部活余暇： ひきこもり感情	体育系強化球技系	58	5.103	1.054	0.138	4.826	5.381	1	6
	体育系強化格闘技系	22	5.500	0.740	0.158	5.172	5.828	4	6
	体育系強化その他	23	4.261	1.764	0.368	3.498	5.024	1	6
	体育系準強化	11	5.000	1.789	0.539	3.798	6.202	1	6
	文化系団体	12	4.833	1.337	0.386	3.984	5.683	2	6
	無所属	74	4.378	1.331	0.155	4.070	4.687	1	6
	合計	200	4.760	1.346	0.095	4.572	4.948	1	6

5. 「希望進路」による感情傾向の違い（表16～17参照）

第5に「希望進路」による感情傾向において特徴的なのは、次の3点である。

- ①「ひとりよがり感情」：大学院への進学を希望する学生は、何が何でも「優」の成績を取得すべきだと考えている。
- ②「ギスギス感情」：大学院への進学を希望する学生は、部活動や余暇活動においてルールを徹底したがる傾向にある。
- ③「攻撃感情」：大学院への進学を希望する学生は相対的に、部活動や余暇活動でうまくいかないのは他人のせいだと考える傾向にある。

表 16：分散分析（希望進路別）

分散分析		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
大学授業：	グループ間	48.154	4	12.039	5.445	0.000
ひとりよがり感情	グループ内	426.720	193	2.211		
	合計	474.874	197			
部活余暇：	グループ間	29.974	4	7.493	4.542	0.002
ギスギス感情	グループ内	318.390	193	1.650		
	合計	348.364	197			
部活余暇：	グループ間	16.540	4	4.135	3.925	0.004
攻撃感情	グループ内	203.324	193	1.053		
	合計	219.864	197			

表 17：記述統計（希望進路別）

記述統計	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の95%信頼区間		最小値	最大値	
					下限	上限			
大学授業：									
ひとりよがり感情①	一般企業就職	91	3.978	1.483	0.155	3.669	4.287	1	6
	教員志望	19	4.158	1.068	0.245	3.643	4.673	3	6
	大学院進学	13	2.308	1.377	0.382	1.475	3.140	1	5
	公務員	24	3.042	1.517	0.310	2.401	3.682	1	6
	まだわからない	51	3.902	1.628	0.228	3.444	4.360	1	6
	合計	198	3.753	1.553	0.110	3.535	3.970	1	6
部活余暇：									
ギスギス感情	一般企業就職	91	3.758	1.268	0.133	3.494	4.022	1	6
	教員志望	19	4.526	1.124	0.258	3.985	5.068	2	6
	大学院進学	13	2.769	1.166	0.323	2.065	3.474	1	5
	公務員	24	4.125	1.361	0.278	3.550	4.700	2	6
	まだわからない	51	4.137	1.357	0.190	3.756	4.519	1	6
	合計	198	3.909	1.330	0.095	3.723	4.095	1	6
部活余暇：									
攻撃感情①	一般企業就職	91	4.758	1.129	0.118	4.523	4.993	1	6
	教員志望	19	5.421	0.692	0.159	5.087	5.755	4	6
	大学院進学	13	4.231	1.235	0.343	3.484	4.977	2	6
	公務員	24	5.042	0.955	0.195	4.639	5.445	2	6
	まだわからない	51	5.157	0.903	0.126	4.903	5.411	3	6
	合計	198	4.924	1.056	0.075	4.776	5.072	1	6

## おわりに

本稿では、「組織感情マップ」のモデルを手がかりに、それが大学生のEQを測定できるモデルとして援用できるのか否か。またその枠組みで見えてくる本学学生の「感情」はどのような傾向をもつのか。これらについて実証的に明らかにしてきた。その結果、まず「組織感情マップ」を援用した「EQマップ」では大学生の感情を測定するモデルとして不十分であるということがわかった。次いで、「回答者の特性（学年、学部学科、入試形態、部活動、希望進路）」を軸として本学学生の感情傾向を明らかにしてきた。実際、注視すべき本学学生の傾向として、次のような点が解明された。

- ① 学年で言えば、2年生が相対的に勉学に熱心であるが、部活動での主体感が弱い。
- ② 学部学科で言えば、ビジネス戦略コースの学生は勉学志向が強く、その一方で知財開発コースの学生は他力本願の傾向がある。また、スポーツマネジメントコースの学生は勉学よりも部活動や余暇活動に主体的に取り組み、仲間の良さや個性を尊重し、連帯感も強い。
- ③ 入試形態で言えば、一般入試で入学した学生は相対的に、部活動や余暇活動のメンバーとは深く関わりたがらないという傾向が見られる。
- ④ 部活動で言えば、無所属の学生および体育系強化部の一部の学生は相対的にあきらめ感が強く、部活動や余暇活動でうまくいかないのは他人のせいだと考え、活動中に孤独を感じる傾向にある。これに対して、体育系の準強化団体（軟式野球部やフットサル部など）の学生は相対的に部活動や余暇活動において特に不満はなく、また文化系クラブの学生は相対的に、自分が頑張らなくとも誰かが何とかしてくれると思う傾向にある。
- ⑤ 希望する進路で言えば、大学院への進学を希望する学生が特徴的であり、何が何でも「優」の成績を取得すべきだと考え、また部活動や余暇活動においてはルールの遵守を徹底し、うまくいかないのは他人のせいだと考える傾向にある。

これらの結果を踏まえ、今後の課題として、本学学生の感情傾向に適した

EQ教育プログラムや学生サービスの提供について吟味しなければならないことは当然のことであるが、その一方でさらに「EQモデル」を改良し、大学生のEQを分析するための確固たる枠組みを再構築しなければならないと考える。

#### 【参考文献】

- 1) ダニエル・ゴールマン著、土屋京子訳『EQ－こころの知能指数』講談社文庫、1998年。
- 2) M. J. イライアスほか著、小泉令三編訳『社会性と感情の教育－教育者のためのガイドライン39』北大路書房、1999年。
- 3) 村上宣寛著『IQってホントは何なんだ？－知能をめぐる神話と真実』日経BP社、2007年。
- 4) 野田稔、ジェイフィール著『あたたかい組織感情』ソフトバンククリエイティブ、2009年。
- 5) 高橋克徳著『職場は感情で変わる』講談社現代新書、2009年。
- 6) 津田太愚著『新・エゴグラム入門－大人気！！超自分解析心理テスト』イースト・プレス、2004年。
- 7) 卜部匡司著「大学におけるEQ教育に関する理論的考察」徳山大学経済学会『徳山大学論叢』第67号、2008年、55-69頁。